



平成30年度 果樹情報 第8号

(平成30年7月9日)



福島県農林水産部農業振興課

1 気象概況（6月後半：果樹研究所）

平均気温は、4半旬が18.0℃で平年より2.5℃低く、5半旬が22.4℃で平年より2.1℃高く、6半旬が25.2℃で平年より4.3℃高く経過しました。
この期間の降水量は11.5mmで平年の14%でした。

2 生育状況（果樹研究所）

(1) もも

ア 果実肥大

7月1日の暦日比較では、「あかつき」は縦径が49.8mmで平年比106%、側径が46.9mmで平年比104%、「ゆうぞら」は縦径が50.4mmで平年比109%、側径が45.3mmで平年比110%と両品種ともに平年より大きい状況です。また、満開後日数による比較では、「あかつき」は平年より小さく、「ゆうぞら」は平年より大きい状況です。

イ 新梢生長

満開後80日（6月29日）における「あかつき」の新梢長は平年比65%と短く、展葉数は平年比82%と少ない状況です。葉色（SPAD値）は平年比95%とほぼ平年並で、新梢は停止しています。「ゆうぞら」は、新梢長が平年比119%と長く、展葉数は平年比109%とやや多い状況です。葉色（SPAD値）は平年比92%と淡く、新梢停止は平年に比べ遅れています。

ウ 核障害

「あかつき」の満開後75日における核障害の発生は、核頂部の亀裂が25%、縫合面の割裂が5%であり、過去18年間の平均と比較するといずれも少ない状況です。

エ 硬核終了日と収穫期予測

「あかつき」の硬核期間は平年並で、硬核期の終了は6月17日頃でした。

7月2日現在、DVRモデルによる「あかつき」の収穫予測では、本年の収穫開始は7月24日頃、収穫盛りは7月27日頃で、平年より9日早い見込みです。

オ 早生品種の収穫

早生品種「はつひめ」の収穫始めは6月29日頃で平年より9日早くなりました。収穫2回の平均値では、果実重は238gと平年より小さく、糖度は13.4と平年よりかなり高い状況です。また、「日川白鳳」の収穫始めは7月2日頃で平年より14日早くなりました。

(2) なし

ア 果実肥大

7月1日の暦日比較では、「幸水」は縦径が39.4mmで平年比125%、横径が45.9mmで平年比124%、「豊水」は縦径が38.9mmで平年比118%、横径が42.2mmで平年比120%と両品種ともに大きい状況です。また、満開後日数による比較では、「幸水」は平年よりやや大きく、「豊水」はほぼ平年並です。

イ 新梢生長

満開後70日における「幸水」の予備枝新梢長は104cm（平年比95%）、不定芽新梢長は91.3cm（平年比97%）でどちらも平年よりやや短い状況です。予備枝新梢の葉数は29.3枚（平年比99%）でほぼ平年並ですが、伸長停止率は44%（平年54%）で平年より低い状況です。

満開後80日における「豊水」の予備枝新梢長は102.8cm（平年比96%）で平年よりやや短く、不定芽新梢長は84.5cm（平年比94%）で平年より短い状況です。予備枝新梢の葉数は27.6枚（平年比95%）で平年よりやや少なく、伸長停止率は100%（平年87%）で平年より高い状況です。

ウ 生育予測

DVRモデルによる「幸水」の収穫予測は、収穫盛期が8月20日（満開後126日）と推測され、平年より11日早い見込みです。なお、同モデルによる裂果初発日は6月30日（満開後75日）と推測されますが、7月2日（満開後77日）現在、まだ裂果の発生は見られていません。

(3) りんご

ア 果実肥大

7月1日の暦日比較では、「つがる」は縦径が60.0mmで平年比123%、横径が67.1mmで平年比123%、「ふじ」は縦径が48.8mmで平年比111%、横径が53.2mmで平年比115%と両品種とも平年より大きい状況です。また、満開後日数による比較では、「つがる」は平年より大きく、「ふじ」は平年並です。

イ 新梢生長

りんごの新梢停止時期は、「ふじ」で満開後60日の停止率が100%に達しましたが、「つがる」では、満開後70日でも93.2%であり、停止時期は平年より遅れています。

(4) ぶどう

ア 新梢生長

発芽70日後における「巨峰」（有核栽培）の新梢長は平年よりかなり長く、展葉数は平年より多い状況でした。また、「巨峰」（無核栽培）の新梢長は平年より長く、展葉数は平年よりやや少ない状況でした。

気象庁[営農活動に役立つ気象情報] <http://www.jma.go.jp/jma/kishou/nougyou/nougyou.html>

3 栽培上の留意点

(1) 共通

梅雨期は降水量が多く、湿害の危険性が高くなります。土壌の過湿は、葉の褐変や黄変落葉を引き起こす原因となるので、停滞水が発生しやすい園地では排水対策を徹底しましょう。また、落葉した場合は着果量の見直しを行います。

一方、本年は6月の降水量が平年の18%（果樹研究所）と極めて少ない状況です。土壌の乾燥が続く場合は、以下の対策を実施しましょう。

ア かん水

5月から夏期にかけて果樹園からの1日当たりの蒸発散量は、晴天日で6～7mm、曇天日で2～3mm、平均で4mm程度であるので、1回のかん水は25～30mm程度（10a当たり25～30t）を目安とし、5～7日間隔で実施しましょう。保水性が劣る砂質土壌などでは、1回のかん水量は少なくして、かん水間隔を短くしましょう。

イ 草刈り

樹と草との水分競合を防ぐため、草生園では草刈りを行いましょう（草生園における地表面からの蒸発散量は、刈り草をマルチした場合、草刈りしない場合の約半分となります）。

ウ マルチ

刈り草や稲わらのマルチを行い、土壌水分の保持に努めましょう。

(2) もも

ア 早生品種の収穫

現在、早生品種の収穫が始まっています。核や胚に障害を持つ果実は、成熟が早まりやすい傾向にあるため、果肉の軟化に注意し収穫が遅れないように留意しましょう。

イ 修正摘果

硬核期が終了し、肥大不良果や変形果、核に障害をもった果実などが徐々に目立ってきています。このため、収穫を控えた中生種の修正摘果は数回に分けて丁寧に実施するとともに、果頂部が変形している果実や縫合線が深い果実、果面からヤニが噴出している果実、

果皮の一部が変色している果実、極端に肥大の早い果実、果頂部の着色が早い果実などは、核や胚に障害があることが多いので、これらの果実に注意して摘果を実施しましょう。

ウ 中生品種の収穫前管理

「あかつき」の収穫期予測では、収穫始が平年より9日早い見込みです。「あかつき」等中生種は今月上～中旬頃から着色期に入るため、夏季せん定、支柱立てや枝吊り、反射シートの設置など収穫前の管理が遅れないよう計画的に実施しましょう。また、降雨により園内に停滞水がみられる場合には、明きょを掘るなど速やかな排水に心がけましょう。

(2) な し

ア 新梢管理

「幸水」では、腋花芽着生向上を目的として新梢誘引を実施する場合、新梢生育が停止する前に予備枝誘引作業を完了する必要があります。まだ終わっていない場合は、急いで作業を進めましょう。

また、新梢誘引は樹体の受光条件向上、薬剤の効果的散布、翌春における長果枝棚付け作業の効率化などが期待できるので「幸水」以外の品種でも積極的に実施しましょう。

イ 着果管理

仕上げ摘果はできるだけ速やかに終了させましょう。この際、着果過多にならないよう、単位面積あたりの着果量を確認しながら摘果作業を進めましょう。なお、裂果が観察される時期の摘果は他の果実の裂果発生を助長する恐れがあるので控え、裂果が終息（満開後90日頃）したら修正摘果を実施しましょう。

(3) りんご

ア 着果管理

7月に入ると花芽分化期を迎えます。仕上げ摘果の遅れは花芽分化率を低下させる原因となるので、早めに仕上げ摘果を終了させましょう。

仕上げ摘果終了後は、随時修正摘果を実施し、小玉果や変形果、病虫害の被害果、傷果、サビ果等を摘果しましょう。

イ 枝吊り・支柱立て

果実肥大にともない枝が下垂するので、樹冠内部の日当たり改善と枝折れ防止のため、支柱立てや枝吊りを実施しましょう。なお、支柱立ての際には、樹全体のバランスや養分の流れを考慮し、養分が枝先まで十分届くようにしましょう。

(4) ぶどう

ア 着房数管理

着房過多は、糖度上昇の遅れや赤熟れ果の発生の要因となります。また、耐寒性の低下や翌年の発芽不良、樹勢の低下などにも影響することから、ベレーゾン（水回り）期までに着房数の見直しを行い、適正着果量に調整しましょう。最終着房数の目安は「巨峰」では3.3㎡当たり9～10房、「高尾」では10～11房とし、樹勢や今後の天候の推移をみながら適宜調整を行いましょ。特に、夏季に低温・日照不足が続く場合には、着房数を制限しましょう。

イ 袋かけ・傘かけ

摘粒作業が終わり次第、薬剤散布を行い袋かけ・傘かけを行いましょ。この作業は病虫害防除や果実の汚れ防止、日焼け防止のために重要な作業です。また、使用した袋枚数を把握し着果量調整の目安とします。棚面が明るい部分では果房に直接強い日光が当たり、日焼けなどの高温障害を引き起こすため、遮光率が高い傘の利用や直射日光が当たらないように新梢の誘引を見直しましょ。

4 病虫害防除上の留意点

(1) 病 害

ア リンゴ輪紋病、褐斑病

輪紋病は果実、枝梢部ともに感受性が高い時期となります。また、降雨日が多くなると

褐斑病の発生にも注意が必要です。7月上旬にいずれの病害にも効果がある薬剤を十分量散布しましょう。

イ モモせん孔細菌病

新梢葉および果実での発生ほ場割合は、福島地域では平年並、伊達地域では平年よりやや高い～高い状況にあります（平成30年6月29日付け病害虫防除情報）。罹病部は二次伝染源となるため、見つけしだいせん除して適切に処分するなど、耕種的防除を徹底しましょう。薬剤防除は、収穫前日数に十分注意して実施してください。

ウ モモ灰星病、ホモプシス腐敗病

早生種では灰星病の重要防除時期にあたるので、7月上旬および中旬に灰星病防除剤を散布しましょう。中～晩生種では灰星病とホモプシス腐敗病を同時防除するために、7月上旬にダコレート水和剤 1,000倍を使用しましょう。

エ ナシ黒星病、輪紋病

黒星病の発生は、ほぼ平年並の状況です（平成30年度病害虫発生予察情報・発生予報第3号）が、梅雨期間中のため今後も注意が必要です。また、黒星病の罹病部位は見つけしだい取り除きましょう。

さらに、輪紋病の重点防除期にもあたるため、7月上旬及び中旬に7～10日間隔で黒星病、輪紋病に効果がある殺菌剤を十分量散布しましょう。

オ ブドウ晩腐病、べと病

袋掛け前にはストロビードライフロアブル 2,000倍を散布し、散布後速やかに袋掛けを行いましょう。また、有核栽培では、摘粒作業が終わりしだい今回の防除を行いましょう。

(2) 虫 害

ア ナシヒメシンクイ

ナシヒメシンクイ第2世代の防除適期は6月6半旬であったと推定されるため、防除を実施していない場合には速やかに実施しましょう。本種はもも等の核果類の新梢伸長が停止するとなし果実への寄生が増加します。例年、なしの果実被害が多い地域では、今回の第2世代以降の防除を徹底しましょう。

イ モモノゴマダラノメイガ

フェロモントラップによる調査では越冬世代の誘殺ピークは6月3日でした。本種の誘殺は7月上～中旬に一旦少なくなった後、7月下旬頃から再び増加します。被害が予想されるもも園では、7月2半旬頃までの防除を重視してください。なお、被害果実は見つけしだい摘除して5日間以上水漬けするなど適切に処分しましょう。

ウ モモハモグリガ

モモハモグリガ第3世代の防除適期は6月6半旬頃であったと推定されるため、防除を実施していない場合には速やかに実施しましょう。本種の発生は、放任園や無防除のハナモモ等が影響していると考えられるため、こうした発生源が近隣にある園地では、今後も発生に注意し、無防除園の管理や放任園の伐採等を行いましょう。

エ ハダニ類

高温が続く場合はハダニ類の急増に注意し、要防除水準（1葉当り雌成虫1頭以上）の密度になったら速やかに防除を行いましょう。

表1 果樹研究所における主要害虫に対する防除時期の推定（平成30年7月2日現在）

今後の気温 予測	ナシヒメシンクイ		モモハモグリガ	
	第1世代 成虫盛期	第2世代 防除適期	第2世代 成虫盛期	第3世代 防除適期
2℃高い	6月17日	6月26日	6月26日	6月30日
平年並み	6月17日	6月26日	6月26日	6月30日
2℃低い	6月17日	6月26日	6月26日	6月30日

注) 演算方法は、三角法による。

起算日：ナシヒメシンクイ 4月23日、モモハモグリガ 5月30日

病虫害の発生予察情報・防除情報

病虫害防除所のホームページに掲載していますので、活用してください。

URL: <http://www.pref.fukushima.lg.jp/sec/37200b/>

農薬散布は、農薬の使用基準を遵守し、散布時の飛散防止に細心の注意を払いましょう。

発行：福島県農林水産部農業振興課 技術革新支援担当 TEL 024(521)7344

(以下のURLより他の農業技術情報等をご覧ください。)

URL: <http://www.pref.fukushima.lg.jp/sec/36021a/>